

Title	<翻訳>ブラーフイー語短編小説2題：『私とわたし』、『父と息子』
Author(s)	アリー, リアーカット
Citation	印度民俗研究. 2024, 22, p. 97-106
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/97764
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

ブラーフイー語短編小説 2 題

— 『私とわたし』、『父と息子』 —

リアーカット・アリー 訳・註

本稿ではアリー (2022) に引き続き、二人の作家によるブラーフイー語小説2題を紹介する。今回訳出する短編小説の作者は、ともにマストゥング (Mastung) 在住のブラーフイー語話者である。マストゥングはパキスタン・イスラム共和国バローチスタン州の州都クエッタの南方50キロ、クエッタとカラート藩王国の古都カラートとの中間にある小都市で、ブラーフイー語のサラール方言 (高地方言) が話されている。

ハサン・ナーシルはマストゥングで1984年に生まれた。現在は体育教諭として勤務するかたわら、ブラーフイー語作家として活動している。『私とわたし』は2018年にマストゥングの *Āmāc Adabī Dīvān* から出版した短編集 *Cīhānī* 『叫び』の50~54ページに収録された短編である。社会で生きていくうちに仮面をかぶらざるをえない人間の内面におけるアイデンティティの危機をスリラー仕立てで描いている。

フワージャ・アフマド・フワージャはマストゥングを拠点とする遊牧民の家庭に1986年に生まれた。定住してから教育を受け、マストゥング・デイグリー・カレッジを卒業した。現在はマストゥングで商店を経営する傍ら、ブラーフイー語の短編小説を執筆し発表している。ブラーフイー語固有語彙を多用した平明な文体で市井の人々の生活を淡々と描写する中に漂うペーススが持ち味である。「父と子」は2017年に書かれた未公刊の短編小説で、貧しいが愛情深い小作農の父と、両親の期待を一身に受けて学業にいそしむ一人息子とのすれ違いを描いている。

ハサン・ナーシル著『私とわたし』(2018)

私は「わたし」と一緒にいた。かれは私のあとをついて来ていた。私には、かれが私を見張っているように感じられた。私は自分の注意力をフル稼働していた。かれの忍び足の音が私をかれの側へと引っばっていた。一度に、私は自分の注意力の外側に出てしまい、私の意識と注意がかれの方へと行っていた。

私は歩みをすこし早めた。かれの足音も早くなった。ついに私も走り始

めた。かれも私のあとを走ってきた。今や私は、別の恐れにとらわれていた：かれが私に追いついて、危害を加えるかもしれない。わたしは暗闇の中でかれに見えないよう、この街の灯りからも離れた。それでもまだ、かれは私のあとを影のようについてきていた。今度は私を不安がとらえた：こいつは私となんの関りがあるのか？なぜこいつは私の後ろを離れないのか？私は自らを夜の闇に隠していたが、それでもかれは私とともにいた。私は群衆のなかに自ら埋没してしまおうと努力したが、それでもかれは私とともにいた。どのカーテンからかかれが私を見ていると感じるほど、かれに見られているという強い感覚があった。

そのとき私もみずから決心した。いつまでかれから逃げるのか。いっそかれに声をかけよう、なぜかれが私の後ろを離れないのか、つまるところ、私がどんな罪を犯したというのか。私には、かれと話を交わしていいか、それで私に責任が生じはしないか、というためらいがあった。ずいぶん考えた後で、私は彼に話しかけた。

「どうして君は、どこまでも私について来るんだ？君の目的は何なんだ？」

さいぜんから私には、かれの影が遠くから見えていた。だがかれと面と向かってみると、私の感覚がけし飛んでしまった。私は立ち往生してしまった。かれの目を見るには、大きな勇気が必要だった。かれをよく見てみると、かれはとても人を怯えさせる外見をしていた。かれを見ると、恐怖と戦慄が身体中に広がった。かれの外見を見ると、毛が逆立つ感覚が身体に起こった。かれが私の近くに来たとき、恐れあまり私の息が止まった。あたかも大天使が直々に魂を取りに来たかのように、私の声は内側に沈んでしまい、私の顔色は変わった。

かれはただちに私の肩に腕をのせた。かれの腕はとても重く、私のひ弱い肩は彼の腕の重みを支えられないほどだった。私はただちに全身の力を奮い起こし、彼の腕を肩から一方へ落した。かれの顔に愛情に満ちた微笑が広がった。かれはこの沈黙を破って私に言った。

「心配しないで下さいよ。」

私の震える唇から出たのはこの声だけだった。「き、君は誰だ？」

「気をしっかりお持ちなさい。僕はあなたの友達です。」

初対面で友情を築こうというかれのやり方は、私に違った印象を与えた。私は心の中で、この男にはきっと利害があるのだろうと考えた。ところが私が考えるや、かれは私の考えたことに答えて言った。

「あなた、僕はあなたとは何も利害はありませんよ。僕はただあなたに安心してもらおうとしてあなたと一緒にいるのです。僕は小さい頃からあなたの友達です。」

かれのこの話を聞いて、私は混乱で硬直してしまった。神様、私の心の中の話が分かるなんて、かれは天使ですか？かれの方を驚きの目で見つつ、私はかれに言った。

「あなた、私がある人と会っているのは、ついさっきからです。私にはあなたのような友達はいません。」

かれは言った。

「君が小さかったとき、学校から逃げては野原を歩き回っていたらどう？僕も君と一緒にいたよ。お父さんに叱られて家から出たときも、僕は君と一緒にいた。十四夜の月を見に村から遠くまで出かけたとき、僕は君と一緒にだった。君が春の花の香りと手を取りあっていた時、大自然の眺めを楽しんでいた時、溜まった水の中の自分の影めがけて石を投げていた時、僕は君と一緒にだったよ。」

君が世界の憎しみに失望していたあの時、僕は君と一緒にいた。君が友情や愛と引き換えに偽りの贈り物を受け取った時、君が内側で壊れていていた時、僕は君の存在のかけらを集めては君を支えていた。人生が君を疲れさせた時、君を理解する人がいなかった時、君の感情の重要性を誰も理解しなかった時、君が正義と手を取り合っていた時、他人の重荷を自分の肩に引き受けようと努力していた時、君は他人の痛みを自分のこととして捉えていた。

君が国の腐敗と危機を糾弾し始めた時、皆が君のもとを去って行った。『俺たちは君と二人三脚だ』と言っていた君の友達までも君を去った。でもその時でも僕は、君の苦しみを和らげようと、君と共にいた。」

今や私の顔色は変わっていた。私の額から汗が出てきた。私は唇を震わ

せて彼のほうを見た。

「君、おれは君のことなんか知らないよ。どうしておれにつきまとうんだい？おれには君の友情は要らないよ。どうしておれの後ろを離れてくれないんだい？」

彼は私のほうを見て考え込んだ。

「君が、自分が苦しかった時の友人を忘れるなんてことが、どうしてあり得るんだい？たぶん今、君にはこの町の人と同じように、真実を聞く勇気がないんだ。」

私は頭に両手を強く当てて、一時に大きな叫び声を上げた。

「後生だからおれの後をついて来るな！ここから行ってしまえ！おれにはお前と友情を結ぶ必要などない。」

私は嘆声を上げて彼に手を合わせた。私の後をついて来ないよう、彼に懇願した。

しかし彼の返答はこうだった。彼は自分の一つおぼえの言葉に固執した。

「僕と友達になれよ。どこであれ君のために働くよ。」

彼が話してくることが、私の負担となっていた。今や私は彼にかかりきりだった。私は、彼との友情が、私を狂気にすると感じていた。私はたえず彼から逃げていた。それでも彼は私が行くあらゆる所で私の後をつけて一緒に来た。

私は彼に尋ねた。

「お前はおれから何が手に入るんだい？どうしておれを人生からすっかりつき落とししたんだ？お前はおれを社会生活から、親戚縁者から落としたらど？どうしておれにそんなことをするんだ？」

彼は言っていた。

「誰も君を理解しない。この社会は君の感情を理解しない。君の性格を、君の愛情を理解しない。君の真実を受け入れない。彼らは、自分たちのほんとうの顔を偽りの衣に隠している。君が真実を語れば、君は生きていけない。僕は君を理解している。君の心を僕に開きたまえ。僕は君を受け入れる。君の真実を支持するよ。」

君が世界をどういう視点から見たいかも、僕は知っている。しかし君が

世界を見るその視点からは、世界は君を見てくれない。ここでは誰も君を承認していない。私は君の友達だから、君のことを承認している。それなのに君は僕から逃げているんだ。」

ある時は、私は彼にうんざりして、自分自身を彼から離すために彼から逃げて、町じゅうの人たち、私の親戚、知り合い、友人を集めに行こうとした。そして彼らに、

「こいつが私を気狂いにしそうなんだ。こいつから私を解放してくれ。」
と言ってやろう。

しかし私が町の真ん中に着いて、叫んで大声を上げてみても、私の声が誰の耳にも届かないのだ。まるで町全体が眠っているかのようだった。こんなに叫んだ後でも、町の人々は気がつかなかった。

私はどうにも仕方なくなり、彼の手を握った。私と、私の内側に隠れている真実は、手を取り合って、自らのねぐらへと帰って行った。

フワージャ・アフマド・フワージャ『父と息子』

彼の両足はひび割れていた。そのひび割れから、いつも血がにじんでいた。古びたサンダルをはいて、彼は朝のお祈りのために早く起きた。部屋から出てくるときはまだうとうとしていた。水溜めの冷たい水で顔と手を洗うと、鼻水が垂れてきた。彼はしじゅう鼻水をぬぐっていた。家でお祈りの敷物を敷いて祈ってから、急いで戻ってきて、油をとり、履物を脱いで足に油を擦りこんだ。彼の履物は縁が傷んでいた。

先週の金曜、ラシードの家に、結婚して二十年して息子が誕生した。長年の誓戒やお祈りののち、家に後継ぎが生まれたのだった。ラシードは村の大地主の小作をしていた。彼は毎晩畑に水を入れに行っていた。寒さのせいで彼の手足はひび割れていた。彼自身も年齢より老けて見えたが、息子が誕生するとともに若者ようになった。今日、彼はとても幸せだった。口元はたえず微笑していた。

今日はラシードの息子の名付け式だった。ラシードは大変勤勉な人間だ

った。一人息子が生まれて、彼に守護者かつ協力者ができた。彼は急いで茶を飲み、町へと出かけた。一、二頭牝山羊を買い、内祝いの菓子を買ひ、他にもたくさん物を買ひ込んだ。嬉しさのあまり足が地面につかないほどだった。彼は菓子類の荷を背負って家にたどり着き、妻に言った。「これらの品をしまっておいてくれ。今日は近所の人やお客が来るからな。」夜になった。彼は息子をアズガルと名付けた。

息子の父となったことで彼はとても幸せだった。彼は愛情をかけて息子を育て、そうして日は過ぎていった。アズガル君は三歳になった。ラシードは朝になると畑に仕事に行き、種を植えた。彼の小麦は実りがとてもよかった。彼はアズガルを村の学校に入れた。アズガルは大いに熱心に勉強した。ラシードの目には、自分の息子が勉強していることで、希望の光が灯っていた。

「この子は無知の闇から光の野原へと歩みつつある。神様がお護り下さいますように。」

父のたった一人の息子だった。

アズガルは両親に面目を施した。彼は五年生で村の学校を卒業した。彼の父はとても喜び、彼に自転車を買った。ラシードは息子の肩に手を置き、小さな笑みをうかべていた。ラシードの歯は黄色く変色していた。茶のしみが歯についたように見えた。かれは自分の歯を舌で一回りなめてから、唇を湿らせつつ言った。

「息子よ、勉強しなさい。学業を自分のものにして、光を拡げなさい。そしてこの町のために勉強しなさい。わしは人生の資産すべてを、わしの心の希望が成就するまで、おまえの学業の成功のために費やすつもりだ。お前には勉強させてやる。お前の運はお前のものだ。だがそれには条件がある。お前は興味をもち、努力して勉強しなさい。お前を町の中等学校に入れてやろう。勉強をさらに進めなさい。」

アズガルは父親のほうを見て言った。

「お父さん、分かっているよ。お父さんはぼくの父親、ぼくのメッカ、お父さんの履物はぼくの頭。お父さんがどんなに貧乏か、ぼくも知っている。お父さんは悲惨な人生を送っている。最近、大地主がとても厳しくて、

お父さんには一斗缶一つの穀物だけ与えて、お父さんの収穫から二千ルピーか三千ルピーも取っている。僕にだって理屈が分かる。地主は年いくらという勘定でお金を呉れない。この大地主たちと来たら、おしゃべりばかりしている。市場へ行っては一日中ぶらついて、腹が減ると家へと帰っていく。ぼくはお父さんの力になりたい。貧乏なお父さんの息子だから。」

アズガルは父のほうを見て、感情を抑えつつこう言った。

父親は身体をゆすって笑った。

「お前はわしの息子じゃなくって、頼もしい友達だよ。お前は勉強しているからな。お前に道理が分かるのが、わしの希望だよ。」

ラシードは朝早く、アズガルをゆすって起こした。

「お祈りをしなさい。クルアーンを唱えなさい。息子や、準備して行こう。中等学校へ連れて行って、お前を入学させてやる。」

アズガルは急いで茶を飲んだ。日の光がまだ山からやっと差してきたところだった。その日アズガルは町の中高等学校に入学した。彼は自転車で通学した。数年経った。彼はよい成績で卒業した。彼の両親は喜んだ。ラシードは、息子が自立できるころまで、勉強を続けることを願っていた。アズガルは政府の教育機関で課程を修了し、証書を受け取った。彼は政府の奨学金で、さらに勉強するためイギリスに行った。

首尾よく数年経った。数年後彼は帰ってきた。母親はとても喜んで、彼に言った。

「そろそろお前の嫁を探そう。」

彼はほほ笑んで言った。

「いや、お母さん、そういう話ではないんだ。まず学業が終わるまで待って。話はその後だよ。」

父親のほうを見て言った。

「アッラーが主なり（お父さんの言いつけに従います）。」

アズガルの声は声変わりしていた。口髭、顎鬚が新たに生えはじめていた。彼は青年期の敷居を新たに越えていた。二、三か月して、またイギリスへ戻って行った。週に一回、携帯電話に近況報告の通話をかけてきて、

「もうしばらく居て、それから帰る」

と言っでは、両親を安心させた。数日が数週間になり、数週間が数か月になり、数か月が数年になって行った。彼の父親は健康を損なって、毎日枕にもたれていた。もう畑仕事はやめていた。視力も弱くなっていた。彼は息子恋しさに、五年前の息子の写真を見ていた。このあまりに長い別離が、彼の両親に影響を与えていた。彼らは弱くなっていた。彼らの目はアズガルの方に固定していた。彼の父は肺炎を患っていた。彼はただアズガルへの希望だけで生きていた。彼は一日じゅう息子の写真を見ていた。

しばらく経ってから、アズガルの携帯電話の番号がつかなくなかった。ずいぶん経ってから、アズガルから電話がかかってくる。彼は少し近況を話した。母親は言った。

「もう帰っておいで。お前の結婚をしよう。それからお前はお戻り。嫁にここに残ってもらおう、息子や。」

彼の父はとても老いていて、ずっと泣いていた。父は言った。

「息子や、帰っておいで。わしは身体の具合が悪い。お前と会えるよう、一度帰ってきてくれ。わしももう長くない。」

アズガルは少し苛立って言った。

「お父さん、帰るなんて無理だよ。帰らないといけないとしても、二、三年してからだよ。」電話を切る間際に言った。「ぼくは結婚して、息子が二人いる。」

それから三日後、彼の父は家に横たわっていた。彼の臉は永遠に閉じていた。

参考文献

アリー、リアーカット. 2022. 「ブラーフイー語短編小説 2 題」. 『印度民俗研究』第 21 号. pp. 87-96.

Nasir, Hassan. 2018. *Cīhāntī*. Mastung: Āmāc Adabī Dīvān.